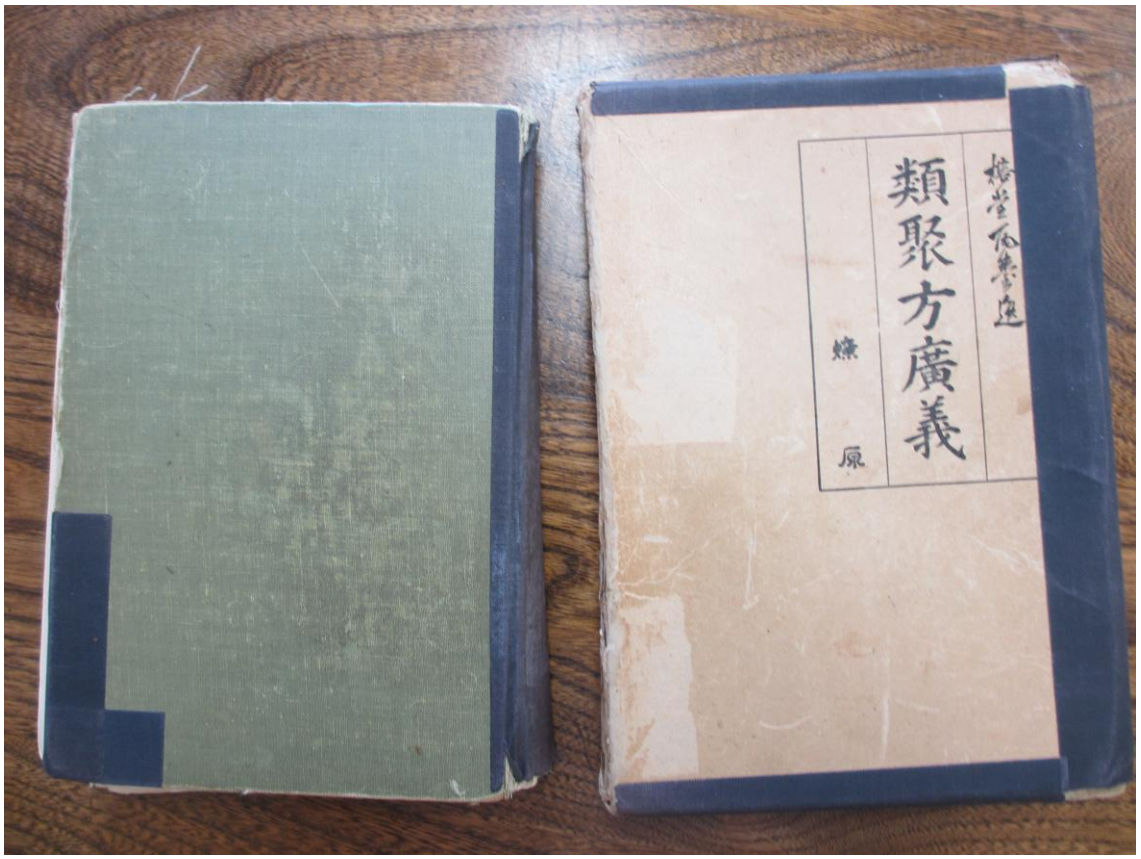
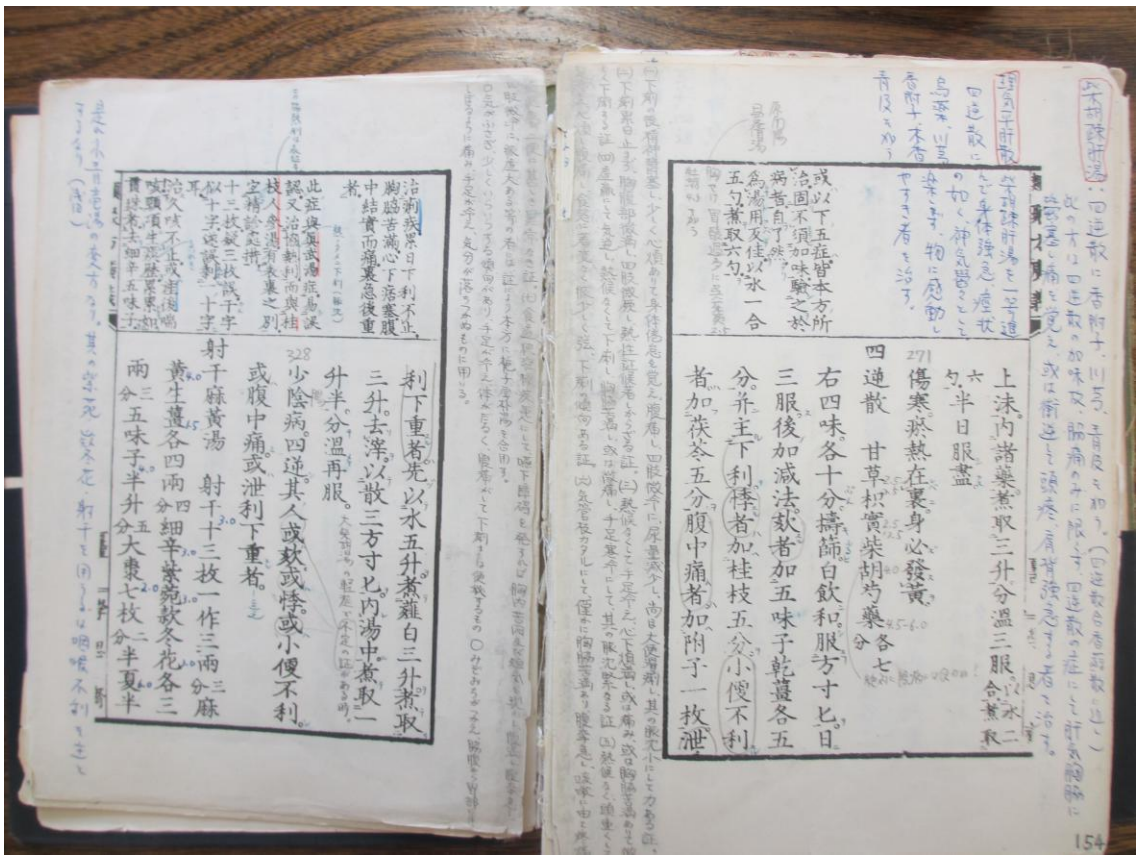
漢方鍼灸経験

学生時代は授業にはまったく出ず、アルバイト以外は芦生原生林に生息していた。卒業式も欠席したので担任から証書を取りにこいと卒後に電話をもらった。京都薬大を卒業後に片山草雲先生に『類衆方広義』を習うため入門のお願いに行くと、「学生時代にわしの講義を一回もでたことのない奴が入門に来るとは･･･」と絶句であったが許されて、月に一回日曜日は神戸から京都の百万遍に通った。最初は漢文に戸惑ったが、後になってわかるが、漢文のほうが暗記はしやすいのだ。漢文と日本語では脳の記憶回路が違う。漢文は図のように見て覚える。日本語は文章を読んで覚える。漢文は読まなくても見た瞬間に理解できるのだ。そういう意味で『類衆方広義』の漢文もページの図として暗記できて簡明である。

仕事は神戸元町の漢方薬局に勤めるが、ほとんど客の来ない店なので、就業時間は図書館にいるような環境で、漢方には必須の勉強時間が充分にあった。参考書として、『古方要方解説』『傷寒論講義』『皇漢医学』、その他の書物をいろいろ読んだが、人生で一番勉強した時期かもしれない。
片山先生が東京での荒木正胤先生の講義を記録した、分厚いノートが 8 冊あったが全部写すこともできた。これは荒木正胤先生の講義を再現するさいに、非常に貴重な資料となる。
また『類衆方広義』を精読暗記する時間もあり、薄給で苦しかったが有難い環境であった。写真は修復を繰り返した、ボロボロになった本。

日本の漢方の特徴は傷寒論に注目したことである。しかしながら中国の傷寒論とはまったく違うのだ。まず五行説の排除ができたのは日本だけであり、それによって単純化され、学習しやすくなった。『原文傷寒論』『康治本傷寒論』『貞元傷寒論』などがそうであり、奥田謙蔵著『傷寒論講義』の解釈もそれに倣ったものになっている。
単純化した傷寒論は、繁用生薬は五十種くらいで馴染みなものばかりで、処方も単純で、内容生薬は多くて十種類くらいなので把握しやすい。
初心者の学習にもってこいの傷寒論なのである。
それと反して中国や周辺の国の伝統医学が五行説が基礎なので非常に複雑になり難解である。





治痢或累日下利不止。胸脇苦滿。心下落塞。腹中結實而痛。裏急後重者。

此症與桂枝湯症。烏梅丸證。又治熱利而與桂枝人參湯有表裏之別。

枳実三枚。厚朴三枚。干姜三兩。黄連三兩。黄柏三兩。

利下重者。先以水五升。煮薤白三升。煮取三升。去滓。以散三方寸匕。内湯中。煮取一升半。分温再服。

328 少陰病。四逆。其人或欬。或悸。或小便不利。或腹中痛。或泄利下重者。

射干麻黄湯

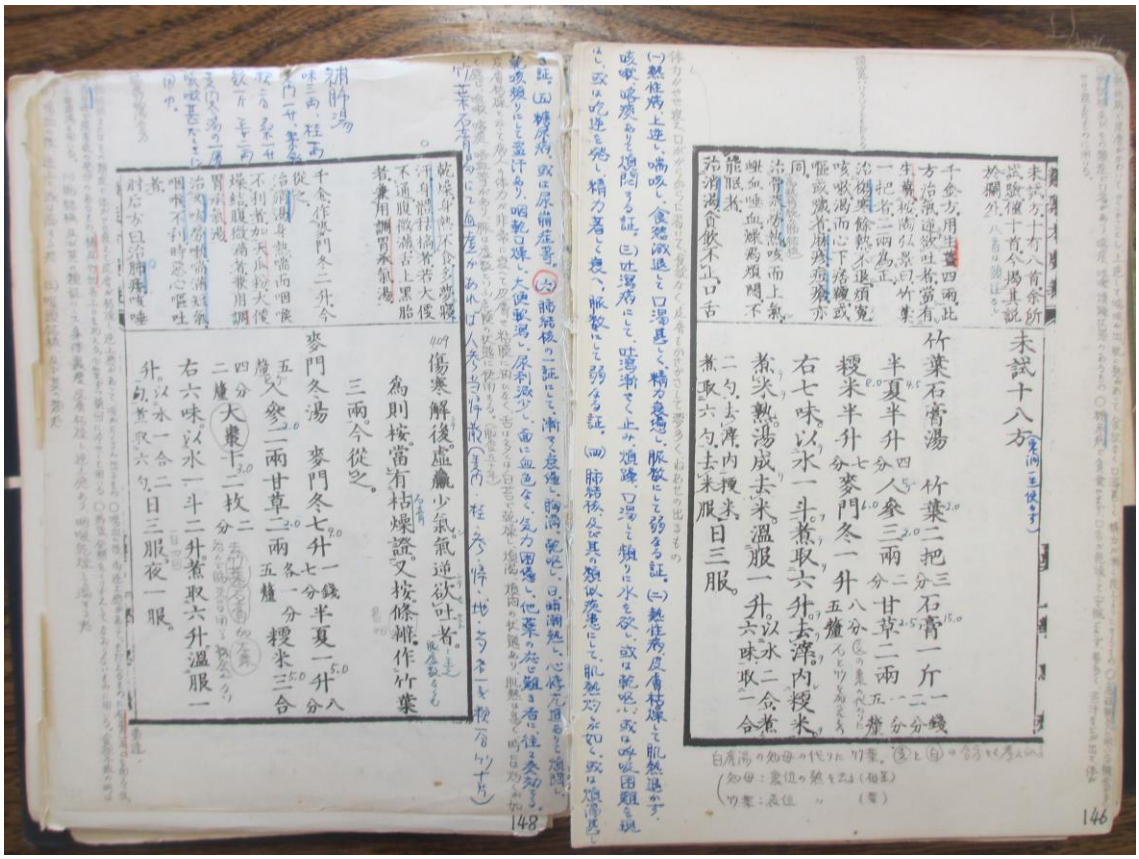
射干十三枚一作三兩 麻黄生薑各四兩 細辛紫菀款冬花各三兩 五味子半升 大棗七枚 半夏半

上沫。内諸藥。煮取三升。分温三服。以水二六勺半日服盡。

271 傷寒。発熱在裏。身必發黄。

四逆散 甘草 枳實 柴胡 芍藥各七分

右四味。各十分擣篩。白飲和服方寸匕。日三服。後加減法。欬者加五味子乾薑各五分。并主下利。悸者加桂枝五分。小便不利者加茯苓五分。腹中痛者加附子一枚。泄



名著出版の近世漢方医学書集成には本当に助けてもらった。私には求められない金額だったが、当時住んでいた神戸大倉山の図書館に一期すべてがあり、コピーして製本に励んだものだ。二期も見たいので図書館で購入できないか、というあつかましいお願いにも会議で検討してみると言われた。後日に連絡頂いたところ、一期も閲覧する人がいない専門書なので二期購入は無理とのこと。しかし調べてみると明石の図書館に二期があるのでご希望の本は借りられるとのうれしいお言葉を頂いたことがある。図書館員は本当に親切だ。
またある文献を調べていると某大学の図書館にあった。大学によってはオープンなところもあるが、ここは部外者禁止とのこと。ところが図書館同士では資料のやりとりができるようで、おかげで資料を入手できた。図書館の人は実に親切だ。

夜間の鍼灸専門学校

勤めて二三年すると鍼灸の免許も取ったほうがよいというので試験を受けてみることにした。当時は学校が少なく、前もってお願いをしないと絶対に受からないといわれ、また推薦状の提出もあった。どうせ受からないのなら推薦状も必要ないと出さなかったが、不思議に合格してしまった。当時の私はまだ実践

もなく、あごひげも２０ｃｍほど伸ばした怖いもの知らずの阿呆だったので、面接のときも、ひげを触りながら、「趣味は東洋哲学です」とか嘯いていたのがよかったのかもしれない。同級生で体力自慢の人からは卒業の時に、当時の私のことを空手の達人だと思い恐かったと聞いたが、極貧で、幽鬼のような感じをだしていた時代だったのだろう。
それから神戸から大阪まで夜間の鍼灸専門学校に通う。当時は２年半の期間であったが、仕事後の授業はしんどく、最低の出席だけの通学であったが、それも代返をしてもらってよくさぼっていた。お酒で疲れをとるのを覚えたのもこの頃である。近くの中学校で吹田市交響楽団の練習をしていたので入団し、後２０年程フルート末席奏者として参加できて楽しい時間を過ごせた。

榕堂会

『類衆方広義』の尾台榕堂先生の出身地である新潟の十日町市に「榕堂会」が発足したときは、これは何が何でも行きたいと決め、大阪から夜行バスで未明に長野の松本につき、大糸線の中で見た車窓からの夜明けの雪景色は忘れられない。軽い気持ちで普段着で行ったので、地元の有力者の方々から名刺を頂いたときは恐縮した。また前の関係者席には何故か私の名前もあったが、恐れ多いので一番後ろの席に収まった。榕堂会のお世話をされていた吉村重敏さんに十日町蕎麦のお店でご馳走になったときは、藤平健先生もご一緒だったので大変うれしく思った。後にオリエント出版社にいた藤原大輔さんが十日町出身で地元で開業したと聞いたときは吉村重敏さんを紹介して喜ばれた。
また打ち上げでは横田観風先生も千葉からいらっしゃり、雨の中、帰り道をご一緒したのを思い出すと楽しい。その後も関東からの患者さんを多く紹介してくださった。

新居浜出張

鍼灸の免許を取ったのを機会に五年ほど勤めた神戸の漢方薬局を退職したが、バブルの頃でなかなか店をだす物件が見つからない。
ぶらぶらしているときに、愛媛県新居浜市の新居浜医療福祉生協で鍼灸師の引き継ぎが一週間空白ができ、その間の期間を募集していたので遊び気分で行ってみた。
ところが後任の鍼灸師が一週間たってもなかなか決まらない。しかし居心地がよくずるずると半年以上もいたが、さすがにそろそろお店をだしたいと考え大阪に戻った。
新居浜での仕事は鍼灸治療のみであったが、あるアトピーの患者さんへの漢方薬のアドバイスが大変喜ばれて、定期的に大阪から新居浜へ来ないか、という

ことになり、1987 年より医師と一緒に漢方外来を始めることになる。漢方の知識はあっても臨床経験が少なかったので貴重な時間となった。現在も出張は続いている。当時は医療機関で漢方薬をだしているところは少なく、四国全土から患者さんが来院し、終業の１７時になっても帰れず、１９時頃までかかることも多くあった。特に今治からの患者さんが半数以上をしめ、驚いた。愛媛は地域によっては気質がまったく異なる。今治の方は律儀なので、漢方薬が効かなくても続けてくれて、時とともに自然に治ったものも漢方薬のおかげにしてくれたので、非常に評判になったこともある。診療所内に生薬も配置して、湯液治療も自由にできる環境は素晴らしいとしかいいようがない。
だが漢方薬だけの治療では限界もあり、鍼灸治療も併用できないか、と希望していたが、現在日本の医療機関内では鍼灸治療は難しいのである。しかしながら当時の細川所長の深い理解もあり、駐車場にプレハブの鍼灸院ができてしまったのだ。現在は鍼灸治療に無縁だった患者さんも日常的に利用でき良い環境

になった。

新居浜は海と石鎚山系があり自然が豊富である。日曜日は必ず遊びに行った。市内から車で１５分走るとアマゴが釣れるところもある。隣の西条市の渓谷にいくとモクズガニも採れる。海でカヌー釣りをすると、メゴチ･キス･ベラが入れ食いのように釣れる。医師･看護師さん達と一緒に別子から赤石縦走を泊りがけでしたこともある。かなりハードな行程だったが、いつ怪我人がでてもまったく恐くない集団である。寒風山の頂には５月でも雪が沢山残っていた。瓶が森の湧水は絶品なので遠くからタンク持参で来る人もいた。石鎚山頂絶壁から下を見たときのの恐ろしさは思い出してもぞっとするほど素敵だ。

生薬のこと

漢方をやるには生薬の知識は欠かせない。良品の生薬を使うことが絶対である。ところが昔はどこのメーカーも蘇葉の良品はなかった。どこかで良品のチリメンジソはないか、と日本中を探していて、鳥取の薬農組合を見学に行くことになった。りっぱな両面紫のチリメンジソがあり、これを乾燥して送ってもらうことにした。片手包丁で刻み袋に入れて保管する作業が面倒だがしかたがない。一度良い生薬をさわると、もう悪い生薬は見るのも嫌になってしまうのだ。半夏厚朴湯や香蘇散は良い蘇葉を使わないと当然効果が悪い。その後参入してきたツムラが良い蘇葉を販売するようになったので、値段は３～４倍するが、そこから安定供給できることになったので助かっている。

写真は鳥取の薬農組合の畑の蘇葉。隣は三島柴胡と荊芥。

奈良桜井の福田商店さんとは親子三代とも知遇があり、学生時代から遊びに行ったところだ。ここには大和当帰･三島柴胡･大和芍薬の良品がある。かつて業界で柴胡が品不足であっても、ここには良品の柴胡の在庫がたくさんあった。
市場にはでない丸い山梔子（市場品は水梔子）を見たり、黄色の生地黄など生薬メーカーから入手できないものも見かけることもあるので勉強になる。
また芍薬を刻んでいる作業所では、室内に芍薬の芳香が充満していて何とも気持ちが良い。

写真は順に昔の福田商店・市場にでない山梔子・芍薬を刻んでいるところ・生地黄

中国・韓国では生薬の修治が盛んだ。
桔梗は肺に使うので白いほうがよいので晒して白くする。
南天は肺に関係するので赤南天よりも白南天がよい。
こんなものは陰陽五行説からの盲信で、ますます生薬を悪くしてしまう。
韓国土産の人参の皮を除いてあるから真っ白で美人な人参だ。しかし味わいはぱさぱさとして軽薄である。当然効果も悪い。
桔梗も人参もそのまま乾燥した、しわだらけの薄茶色のものがよい。しかし残念ながら現在は市場では出ない。
浅田宗伯が「薬の修治は、製して毒を増すものは必ず製すべし」というのは至

言である。
大陸は乾燥する土地柄か、半夏の乾燥させる薬能を怖がり、飴色になってしまった半夏にどれだけ効果があるのだろうか。
ウチダ和漢薬の昔の広告に、「古方の生薬」といった言葉があったが、心意気を感じる。

　料理でもそうだが、良い材料を使い、良い作り方をすると美味しいものができる。漢方軟膏でも生薬を厳選して製造法を考察すると良い紫雲膏ができる。原典は中国の潤肌膏だが、こちらの名前のほうが相応しいと思う。昔からいいゴマ粒を模索していて、３０年ほど前から小野田製油の玉締めゴマ油に定着した。良心的な価格で、料理にも手放せなくなった逸品である。
また江戸時代の文献を参考にして、当帰と紫根は従来の三倍量以上使用した、このことは、「紫雲膏材料の考察」として、『漢方の臨床』誌（1993 年･第 40 巻･第 7 号）にも発表した。
手前味噌ではないが、手前の紫雲膏が世界で最高品なのである。

江戸時代の古書
古書のコピーは鍼灸学校や公立図書館に覆刻本があるものはそれをコピーさしてもらった。それ以外では京都大学図書館の富士川文庫は漢方の古書の宝庫で、一般にも開放してくれ好意的だ。そこでのコピーを受け持っている鈴木マイクロさんは当時一枚８０円という良心的な価格で、注文したコピーと一緒に毎回毛筆での手紙も一緒に同封されていた。

35MMカラーフィルム現像

	フジクローム	エクタークローム	コダクローム	ネガカラー
20, 24枚撮	610円	67[illegible]円	800円	400円
36枚撮	970円	1,00[illegible]円	1,260円	500円

カラープリント

NP ネガフィルムより

サービス			手焼		
E	8.3cm×12.1cm	40円	手札	9.3cm×11.6cm(有効画面)	600円
3R	8.9〃×12.7〃	50〃	中判	12.0〃×17.3〃(〃)	600〃
5R	12.7〃×17.8〃	220〃	八ツ切	16.1〃×20.7〃(〃)	900〃
8R	20.3〃×25.3〃	600〃	六ツ切	19.6〃×24.5〃(〃)	1,200〃
10R	25.3〃×30.5〃	800〃	四ツ切	24.5〃×29.5〃(〃)	1,400〃

RP ポジフィルム(スライド)より

サービス		手焼			
フジ・コダック			フジ	コダック	チバ
L	130円	手札	800円	1,200円	1,000円
2L	250〃	中判	1,500〃	1,200〃	2,000〃
W六切	1600〃	六ツ切	2,000〃	1,600〃	4,000〃
W四切	2600〃	四ツ切	3,500〃	2,600〃	6,000〃

フィルムプリント

銀塩(35mm×30.5m) ダイレクトデューブ(DD)	1本	7,000円
銀塩(35mm×30.5m) ポジフィルム(反転)	1本	6,000円
銀塩(16mm×30.5m) ダイレクトデューブ(DD)	1本	5,000円
銀塩(フィッシュ) ダイレクトデューブ(DD)	1枚	500円
銀塩(フィッシュ) ポジフィルム(反転)	1枚	400円
ジアゾ(フィッシュ)	1枚	300円

・ロールフィルムは日本マイクロ協会指定のリールに巻き、紙箱に入れた価格です。

レントゲンフィルムデューブ

14吋×17吋 (35.6cm×43.2cm)	3,000円
14〃×14〃 (35.6〃×35.6〃)	2,400円
11〃×14〃 (27.9〃×35.6〃)	1,800円
10〃×12〃 (25.4〃×30.5〃)	1,500円
8〃×10〃 (20.3〃×25.4〃)	1,200円

昭和63年5月1日

価格表

株式会社
鈴木マイクロフィルム研究所
〒606 京都市左京区吉田牛ノ宮町3－7
TEL 075(771)4467
FAX 075(771)4499

マイクロ撮影

35MM		基本料金(1件につき)		350円
	M	文献複写(ミニコピーフィルム使用)	1駒	50円
	A	A3判以下の図面又は図表	1駒	100円
	C	A2判～A1判以下の図面又は図表	1駒	150円
	E	A1判以上の図面又は図表(但しA1はC価格)	1駒	200円
	B	図案，写真，抜取り撮影，Xレイフィルム他	1駒	250円
	D	物品撮影他	1駒	500円以上

・古文書等の文献で合紙を入れる場合、1コマにつき10円割増しとなります。
・ターゲット及びマイクロフィッシュのタイトル料は実費ご請求いたします。
・サイズ不揃いのものを一定の大きさに入れたり、1コマに小型のものを数枚入れる場合等、特別に手数を要するものは割増し料金となります。

マイクロフィルム現像

16MM (30.5m)	1本	3,500円
35MM (30.5m) ミニコピー	1本	4,000円
35MM (30.5m) ネオパンF.X	1本	5,000円
35MM (36枚撮以下)	1本	300円

・現像には細心の注意を払っておりますが、機械の故障、停電等の場合におきました事故に対しては同数の新しいフィルムとお取りかえいたします。それ以外の責はご容赦いただきます。

マイクロフィルムよりの引伸し

使用材料 / サイズ	極薄手(CH)	フィルムベースクリア	WPペーパー 線画	WPペーパー 写真	普通紙リーダープリンター
A5 以下	70	—	200	400	—
A5 (14.8cm× 21.0cm)	70	—	200	400	—
B5 (18.2〃× 25.7〃)	100	—	—	—	—
A4 (21.0〃× 29.7〃)	130	800	400	800	50
B4 (25.7〃× 36.4〃)	200	1,300	—	—	70
A3 (29.7〃× 42.0〃)	320	1,500	800	1,500	100
A2 (42.0〃× 59.4〃)	650	3,000	1,600	3,000	—
A1 (59.4〃× 84.0〃)	1,300	6,000	3,200	—	—
A0 (84.0〃×118.8〃)	2,600	10,000	—	—	—

単位：円

・マイクロフィルム以外のフィルムからの引伸しは割増し料金になります。
・寸法指定はB4判以下でもB4判の料金になります。
・マイクロ撮影・引伸しで一度に多量のご注文はその都度見積りさせていただきます。

普通印画紙引伸し，密着

印画紙サイズ / ネガサイズ	35MM，2B	4吋×5吋	密着
手札以下 9cm×13 cm	90円	—	—
中判(キャビネ) 13〃×18 〃	250〃	300円	200円
六ツ切 20.3〃×25.4〃	600〃	800〃	—
四ツ切 25.4〃×30.5〃	800〃	1,000〃	400円
大四切 27.9〃×35.6〃	1,500〃	1,500〃	—
半切 35.6〃×43.2〃	2,000〃	2,000〃	—
全紙 45.7〃×56.0〃	4,000〃	4,000〃	—

・寸法指定及びブルースライドよりの引伸しは、中判以下でも中判の料金になります。

35MMスライド作製(ペーパーマウント仕上げ)

白黒スライド(要，ネガフィルム)	1駒	150円
ブルースライド(要，ネガフィルム)	1駒	150円
パナブルースライド	1駒	500円
パナ白黒スライド	1駒	400円
カラースライド(原稿A3以下)	2駒迄1000円，2駒以上1駒	500円
(特) カラースライド(縮小デューブ，物品撮影プレパラート等)	2駒迄2000円，2駒以上1駒	1000円
ネガカラースライド	1駒	80円
ネガカラーラッシュ(24枚撮)	1本	700円
ネガカラーラッシュ(36枚撮)	1本	900円
フジカラースライドデューブ	1駒	150円
コダックカラースライドデューブ	1駒	200円

・合成スライド、黒バックスライド、各種色付スライド作製は内容により料金が異りますので別途に定めております。

4×4スライド作製(ガラスマウント仕上げ)

4×4白黒スライド(要，ネガフィルム)	1駒	800円
4×4カラースライド	4駒迄8000円，4駒以上1駒	2000円
4×4カラースライドデューブ	1駒	2000円

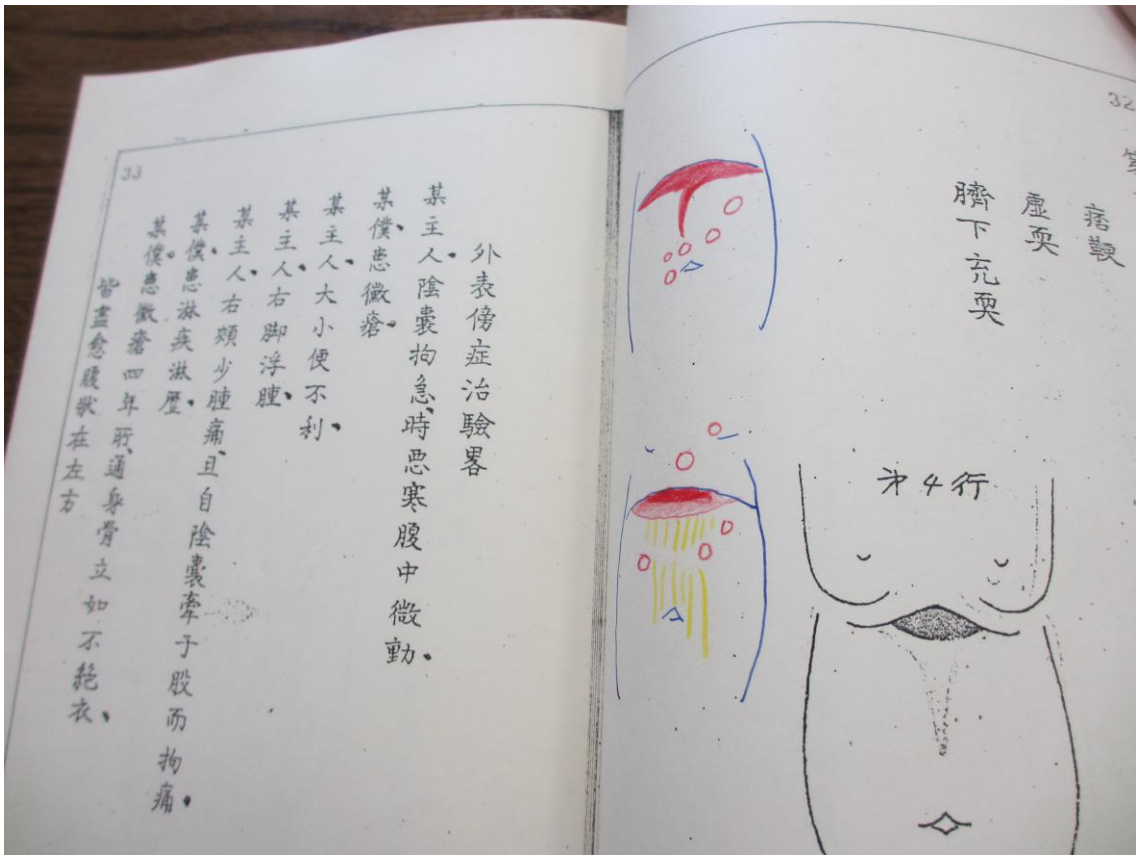
マウント加工

ペーパーマウント	1枚	20円
プラスチックマウント(ガラスなし)	1枚	30円
プラスチックマウント(ガラス入)	1枚	100円

・貼り合わせ合成等は，内容により別途料金を定めております。

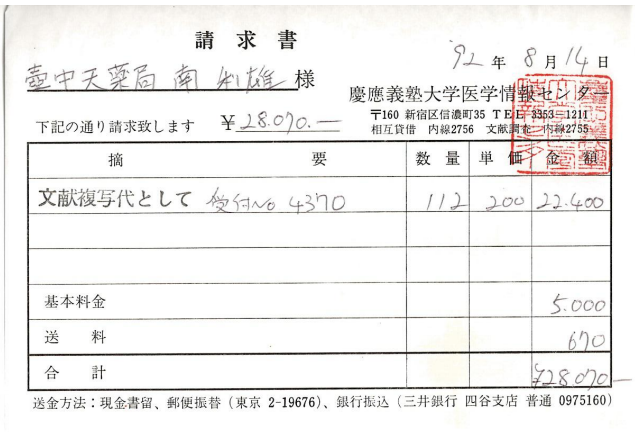
毛筆の手紙が同封されるのは、浅草に鍼を注文したときも同様であった。私が注文していた時代は四代目の神戸源造氏だと思うが、上池栄著『経穴の使い方鍼の刺し方』にもいろいろとエピソードがあり微笑ましい。シーボルトに鍼をしたのは石坂宗哲であり、九鍼セットを贈ったのは初代神戸源造である。

江戸時代の本でカラー本もある。コピーしたものと色鉛筆を持参して富士川文庫に行き、原本を見ながら写したこともある。『珍極図説』や『腹舌図解』がそうであった。



武田薬品内にある杏雨書屋の外部業者に頼んだときには、コピー一枚２００円以外にも撮影フィルム代として一枚につき２００円くらい払った覚えがあるから結構な出費となった。

ちなみに慶応大学の富士川文庫に依頼したときは、コピー一枚２００円と更に着手金５０００円支払った。



請求書

92年 8月14日

壺中天薬局 南 知雄 様

慶應義塾大学医学情報センター
〒160 新宿区信濃町35 TEL 3353-1211
相互貸借 内線2756 文献調査 内線2755

下記の通り請求致します ¥28,070.—

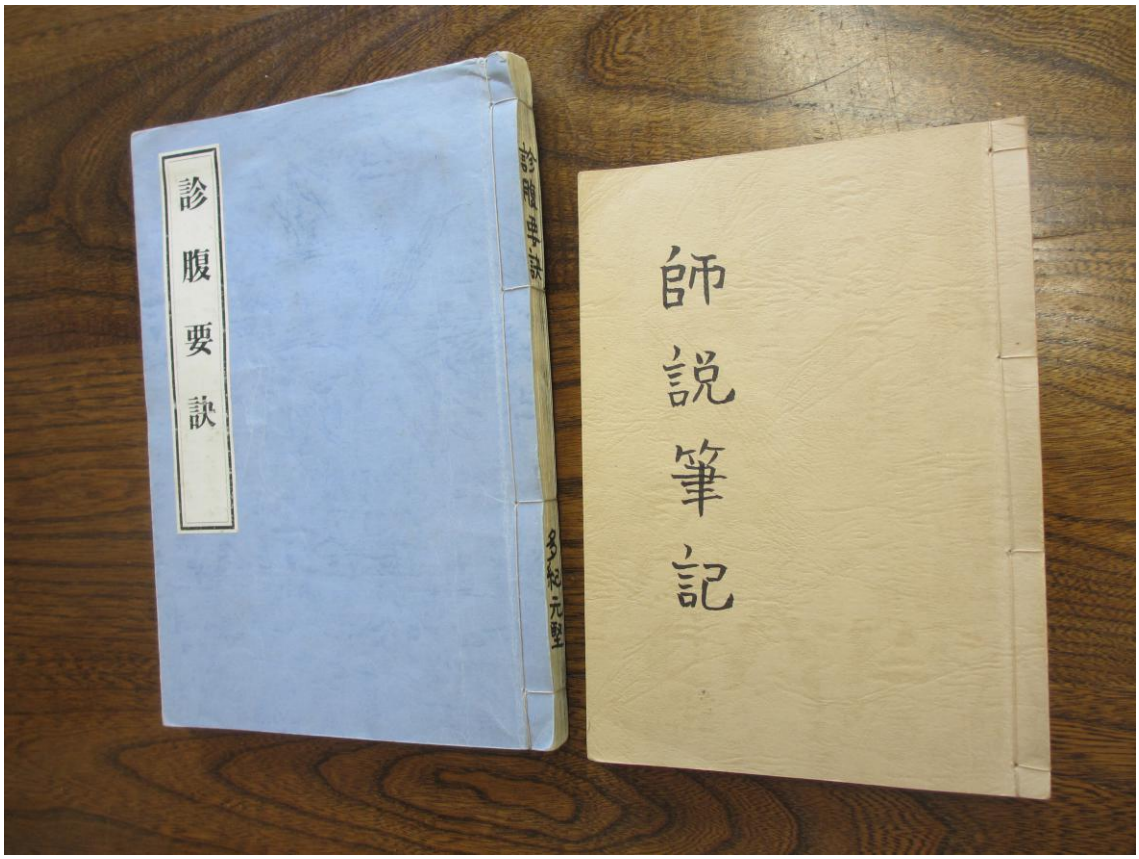
摘要	数量	単価	金額
文献複写代として 受付No. 4370	112	200	22,400
基本料金			5,000
送料			670
合計			¥28,070—

送金方法：現金書留、郵便振替（東京 2-19676）、銀行振込（三井銀行 四谷支店 普通 0975160）

漢方･鍼灸の貴重な文献を多く出版したのは高いと評判のあるオリエント出版社だ。1988年に天六で漢方薬局と鍼灸院を開店した際、オリエント出版社は近くなので、よく野瀬眞社長がお店に来て、漢方煎じ薬もお出しした。オリエントで働いたことのある、長野仁･藤原大輔･日色雄一、各先生方もよく寄ってくれた。店は暇だったので雑談を楽しめた。

オリエントの本というと高額で有名だが、杏雨書屋や富士川文庫のコピーを取り寄せて製本する費用と苦労に比べると決して高くは感じない。

集めたコピーを製本するには、自分で和綴じの製本をすると簡単だ。束ねて適当に千枚通しで穴をあけ麻紐で縛るだけ。本物のように見栄えもよい。
分厚い本でも大丈夫である。



出版科学総合研究所が江戸時代の傷寒論･金匱要略の解説書を原本のまま出版してくれたのには感謝したい。これらの書物を古書で求めるとなると、想像もできない金額になってくる。中でも中西深斎の『傷寒論弁正』は傷寒論研究には必携である。他に多紀元簡『傷寒論輯義』『金匱要略輯義』山田正珍『傷寒論集成』なども出版してくれた。日本の漢方の基礎である傷寒論研究には欠かせない書物だ。

盛文堂も古書のレプリカを安価で製作してくれた。
中神琴渓『生生堂雑記』『生生堂医譚』 『生生堂治験』
和田東郭の『蕉窓方意解』・菅沼周圭『鍼灸則』・石坂宗哲『鍼灸説約』・今村了菴『鍼灸指掌』などいずれも本物そっくりで、美術本としても通用しそうな装丁である。

中国書・漢方専門の横田書店は昔は上六にあって、店主が朴訥というか、ユニークな方だった。雑然と本が積まれた奥にいて、初めての来客に、「もうちょっと居はるんやったら店番してくれへんか。わしご飯食べに行きたいねん」とか言われると返事もできないくらいの驚きだ。永富独嘯庵のお墓が近くにあると教えてくれたのも横田さんだ。それ以来蔵鷺庵には度々訪れている。ある時には寺師睦宗先生がお墓の前にいて驚いたこともある。
1995 年に蔵鷺庵で永富独嘯庵二三〇回忌追善祭の法要があったときも参加したが全国から多くの方がいらっしゃり、『漢方の臨床』誌でも紹介された。
『漫遊雑記』は評価が非常に高いが、難解な漢文である。富士川游の訳本があるが、これは国文にもかかわらず読むのは難しくまた入手困難である。粟島幸春著・譯註『医聖永富独嘯庵』によって初めて内容を理解できた次第である。

漢文を読む素養のないものにはありがたい本である。

原南陽の『叢桂亭医事小言』を初めて読んだときは現代的な考えかたなので驚いた。後に山脇東門の『東門随筆』を読んだときに、同じことを感じたので、師匠の東門の影響であろう。

『東門随筆』は写本が出版されていたが、異本が多く読んでも理解しにくい。荒木ひろし先生にお願いして数冊から校正本を作ってもらい、トンプーブックスから出版してもらった。先生はお仕事が遅く、気を許すと夏でも冬眠してしまうので、さんざん叱咤激励しての結果である。おかげで読む機会が少ないが研究会でもテキストとして利用した。

しかしながら江戸時代の漢文の本は読みにくい。村木毅著『ステップアップ傷寒論』は現代カナ使いに治したものを紹介してくれているので便利だ。

オリエント中国研修の旅

中国研修の旅

ご案内

―趣旨―

設立以来、国宝・半井家本『医心方』、国宝・仁和寺本『黄帝内経太素』などの東洋医学の最善本や、未刊の基本典籍の影印に邁進して参りました小社は、お蔭様をもちまして昨年２０周年を迎えることができました。その影響が日本国内に止まらず、中国・台湾はもちろん欧米諸国にまで波及していることは実に喜ばしい限りです。

これまで“文献”という“もの”を介して漢方・鍼灸の学術向上に貢献してきた小社ですが、ここに“中国研修の旅”と銘打ち、北京において鍼灸臨床家・研究者の国際交流の場を設けることにいたしました。

このたびの鍼灸学術研修会は、第五回日本鍼灸臨床文献学会を兼ねるものです。ご講演を賜わるのは、郭霽春・史常永・銭超塵・張燦玾・馬継興・余瀛鰲・李今庸・李鼎・凌耀星（五十音順）の先生方です。みな中国屈指の著名人ばかりであります。そして、これらの先生方が一堂に会するのは、中国国内の学会などでさえ皆無だったといわれており、ましてや、この先生方が日本の研究者・臨床家に対して肉声で語りかけるという機会は、空前絶後といってよいでしょう。講演の内容は、『黄帝内経』『難経』『甲乙経』『鍼経指南』など、鍼灸文献に関する各先生の最新の研究成果となっております。さらに“中国研修の旅”特別企画として、邱茂良・楊甲三両先生に鍼灸臨床実技を公開していただきます。伝説的な老中医の手技・手法を肉眼で目にできるのも、たいへん貴重な体験といえるでしょう。また、現在、第一線で活躍し将来を嘱望されている高文鋳・黄龍祥・柳長華の三先生にも特別参加していただき、そのほか著名な先生方も参加していただきます。

この“中国研修の旅”を通じて、日中の人的交流が一層深まり、相互に啓発しあいながら、鍼灸の学と術とが21世紀に向けてより発展していくことを念願いたします。皆様のご参加をお待ちしております。

― 記 ―

1．期　　間：平成９年（１９９７年）３月１６日～３月２３日（７泊８日）
　　※研修日は４日間とし、その他は自由行動とする。
2．会　　場：崑崙飯店（北京市；クラス五ッ星）
3．旅行代金：１５４，０００円（中華国際航空使用）。旅行代金は12月30日迄にお振込み下さい。
4．旅行条件：

【旅行代金に含まれるもの】
◎研　修　費
◎往復航空運賃；関西国際空港←→北京国際空港。※大阪のみの発着です。
◎会場送迎費用；北京国際空港←→崑崙飯店、１往復のみです。
◎宿泊料金；崑崙飯店使用。２人１室を基準とした宿泊料金です。
（一人部屋希望追加料金；49,000円／7泊分）
◎朝　食　代；毎朝。

【旅行代金に含まれないもの】
◎超過荷物運搬料
◎昼食・夕食・その他飲食代
◎個人的性質の費用
◎パスポート取得・ビザ取得のための費用
◎旅行障害保険料
◎関西国際空港・北京国際空港の使用料
◎関西空港迄の往復の旅費

5．申込締切日：平成８年７月３１日㈬迄（参加申込者には、スケジュール等後日詳細をご連絡申し上げます）
　　定員１００名：すでに参加者半数につき、先着順といたします。
　　※お申込はお葉書またはお手紙でお願いいたします。
6．取消条件：１月３１日㈮迄に取消の場合、全額お返しいたします。その後取消の場合は返金いたしませんのでご了承下さい。
7．そ　の　他：▣航空運賃・宿泊費・出発日など、諸般の事情により変動のあることを予めご了承下さい。
　　▣研修のための旅行ですので、自己管理をしっかりして下さい。責任は一切負いません
　　▣パスポート・ビザ取得に関しては、実費にてご相談に応じます。

主催：株式会社オリエント出版社
後援：日本鍼灸臨床文献学会

— 講師一覧 —

◇郭霭春先生〔1912年生〕

天津中医薬大学教授。趙鎔軒に師事し、同医史教研室主任、河北新医大学・河北中医薬大学中医基礎教研組副組長を歴任する。著書は『中国分省医籍考』『中国鍼灸荟萃・現存鍼灸医籍卷』『黄帝内経素問校注』等多数。

◇史常永先生〔1931年生〕

遼寧省中医究院主任医師。伯・史趙璧と師・王文修の指導を受け、内科に精通し、『内経』訓詁と中国医史の学に多くの創見を持つ。編著に『中国医学史講義』『劉純医学全集』等多数あり、現在『霊枢校注』を執筆中である。

◇銭超塵先生〔1936年生〕

北京中医薬大学教授。北京師範大学卒後、陸宗慶に師事する。音韻訓詁研究による医籍の整理に長じている。編著は『中医古籍訓詁研究』『内経語言研究』『唐本傷寒論』『古代漢語』『千金翼方詮訳』『傷寒論校注』等多数。

◇張燦玾先生〔1928年生〕

山東中医薬大学学長・医史文献研究所所長ほか多くの役職を歴任。中医基礎理論研究・中医古籍文献整理研究に突出する。編著に『黄帝内経素問校釈』『鍼灸甲乙経校釈』『経穴解』等があり、『鍼灸甲乙経校注』が近刊となる。

◇馬継興先生〔1925年生〕

中国中医研究院中国医史文献研究所研究員のほか、多くの役職を兼任。中国医学史・中医文献学・鍼灸学及び本草学の研究に長年従事している。著書は『中医文献学』『馬王堆医書校釈』『神農本草経輯注』等多数。

◇余瀛鰲先生〔1933年生〕

中国中医研究院中国医史文献研究所研究員。父・余無言と師・秦伯未の学術を継承して内科臨床に長じ、中医臨床文献学科設立への貢献は多大である。編著は『内経類証』『現代名中医類案選』（日本語訳あり）等多数。

◇李今庸先生〔1925年生〕

湖北中医薬大学教授。訓詁学・古文字学・校勘学等を運用して『黄帝内経』『金匱要略』等の古代医籍を整理し、独創的な見解を提出している。『読医心得』『読古書随筆』『金匱要略講解』等多数の著がある。

◇李　鼎先生〔1929年生〕

上海中医薬大学鍼灸学教授。長期間、医学史と医籍研究に尽力し、特に金元明代の鍼灸に精通する。主編に『鍼灸学辞典』、共著に『経絡十講』『鍼灸学釈難』、著書に『鍼経指南集注』『神応経・鍼灸玉龍経合注』等がある。

◇凌耀星先生〔1919年生〕

上海中医薬大学教授。十六世相伝の中医で父・凌禹声に医を学び、内経教研組主任・顧問を歴任する一方、中医内科にも長ずる。全国中医学院『内経』教材や『実用中医内科学』『難経校注』『経学会宗校注』等を編する。

— 実技指導 —

◇邱茂良先生〔1913年生〕

南京中医薬大学教授兼附院主任医師。鍼灸大家・承淡安に師事し、中西医結合の立場から鍼灸の治療範囲拡大を主張する。理法方穴の整合性と操作技術の規範化を強調する。編著は『中国鍼灸治療学』『鍼灸纂要』等多数。

◇楊甲三先生〔1919年生〕

北京中医薬大学東直門病院教授兼主任医師。呉秉林・承淡安・華慶雲に師事し、半世紀に亙って中医鍼灸臨床および教育に従事し、国際交流にも積極的である。編著は『鍼灸腧穴学』『楊甲三取穴経験』等多数。

— 特別参加 —

◇高文鋳先生

中国中医研究院中国医史文献研究所研究員。編著：『（輯校注釈）小品方』『（校注）外台秘要方』『（校注）華佗遺書』等。現在『医心方』を校注している。

◇黄龍祥先生

中国中医研究院鍼灸研究所副教授。編著：『黄帝明堂経輯校』『鍼灸甲乙経（新校本）』『中国鍼灸刺灸法通鑑』等。現在『鍼灸古典聚珍』を編纂している。

◇柳長華先生

山東中医薬大学医史文献研究所副所長。編著『経穴解（校注）』『石室秘録（校注）』『中医方剤大辞典』等。現在『難経集注校釈』を執筆している。

（各五十音順）

お問合わせ：株式会社オリエント出版社
〒530 大阪市北区天神橋3－6－26 扇町パークビル
06－358－1018㈹

オリエント出版社が 1997 年から毎年「中国研修の旅」を始めた。北京の五つ星ホテルである、崑崙飯店で、中国国内の臨床家を集めて、一週間終日、技と理

論を披露してくれるものだ。日本全国から毎年多数の参加者が集まるのは圧巻的である。

第一回目のときにエレベーターの中で声をかけてきたのは世間一般の人とはまったく違う風貌の荒木ひろし先生だ。（その後我が家で一泊することもあり、娘が普通の人でないようで不安がっていた）先生とは不思議とずっと前からの知り合いのような感じがして、すぐに打ち解けた。

森秀太郎先生も常連で毎回毎夜ご一緒した。豪胆な方で、現地語もできないのに単独で各地を探索する無謀さには驚くが、無事北京に帰ってきたときは皆喜んだものだ。北京から数時間かけて行った安国の生薬市場では、店主の前で「ちょっと生薬のサンプルをもらうから」というジェスチャーと笑顔で勝手に収穫した獲物で両ポケットが満杯になっていた。やはり人物だ。

西田皓一先生と初めてお会いしたのも何回目かの北京へ行く途中の関空だ。それ以来毎晩美食家の先生と夕食を共にした。先生が火鍼に始めたきっかけは、何をしても治らなかったゴルフ肘が北京で初めての火鍼で軽快したことである。それからは高知県南国市でおかしな治療する変わった医者ということで評判になったと聞いた。またそれ以来日本全国を講習会でご一緒に回り、地元の先生方とも仲良くなった。

春の北京はまだ寒いので羊のシャブシャブが体を温めてくれる。皆さん食べすぎて体調を悪くするくらいに美味しいのだ。
北京ダックは有名な店よりも隠れた名店である、利群烤鴨店がよかった。リンゴの牧で燻したダックの全身を頂く。水かきや内臓もいける。ただトイレの衛生状態は絶句ものだった。
毎晩北京の有名な店を回った。日本の四川料理はお子様料理か、と感じるくらい本場の四川料理は殺人的な辛さだ。地元人も注文の時は、辛くしないでねと念を押す。それでも辛い。この辛さは水を飲んでも、ビールや白酒を飲んでも解消しないが、不思議と豆乳が和らげてくれる。四川は盆地で冬は寒くマーラーで温まり、夏は暑いのでマーラーで汗を大いにだして冷やすので具合がよい。

北京では本と鍼灸道具の購入に熱がはいった。
「皇漢医学叢書」として日本の江戸期の文献をそのまま写真印刷したものがあり、紙質は悪いがなにより安い。『備急千金要方』を江戸医学館が出版したものがたった７００円ほどだった。

道具も日本では入手できない、火鍼･巨鍼、様々に温灸器など宝庫である。スーツケースに入らないほど買ってしまうので、国際郵便でも送ることになるが、鍼を送るのはご法度なので、係官が梱包した箱を開けて内容をいちいち確認する厳格な調査が入る。ただ灸関係は問題なく何を送っても大丈夫である。

毎年北京では飽きてきた、というので上海で開催されたことがあった。上海市立気功研究所を石原克己先生と一緒に訪れたときに、柴所長と会談できた。前から気になっていた呼吸法について質問すると、やはり気功師は声楽家や管楽器奏者と同じく逆腹式呼吸を使っているとわかった。息を吸ったときに腹筋を緊張させているので、膨らまず、腰部が膨らむのが逆腹式呼吸だ。下半身にも圧力がいくので、普通の腹式呼吸よりも身体全体の巡りが非常によくなる。足先まで気が巡るので、「真人の息は踵を以ってする」が実際のことだとわかる。

老中医の治療をみて感じたことは、説明には中医弁証を使うこともあるが、治療方法は統一せず、各自違い、まさに職人の世界である。これは鍼灸の治療方法のアバウトさを表すものだろう。

日本の伝統鍼灸･腹診･刺絡

最近は経絡治療と中医学などが主流のようだが、私の治療方法は江戸時代の文献より学んだものである。
日本だけが江戸時代に他の国とは違って、五行説から脱却した考え方ができた。このことは、岩波書店『近世科学思想　下 63』に詳しい。原文が変体仮名や漢文で、読みづらい、『薬徴』『医事或問』『師節筆記』を現代カナ使いにして解説をしてあり、最後にある「近世前期の医学」大塚敬節は必読ものの圧巻である。
また腹診のルーツは中国であるが、日本でのみ発達したのは特異的である。
鍼灸界は脈診を謳う自称名人もいるが、脈診は主観的で難しく、急性や感染症の初期には重要だが、腹診は客観性があり、慢性疾患には診断で優っている。当然鍼灸治療でも腹診が主でないといけないわけである。
歴史上の文献を読み、共有すると自分の経験にもなるのだ。例えば初めて治療する病でも信頼できる症例を多数共有しているとまったく違ったものになる。経験は大事だが人生で経験できることは限られているので、歴史的な資料を共有しなければならない。
鍼灸史を調べると、日本の伝統鍼灸は腹診と刺絡が主ではないか、と感じずにはいられない。ところが私が鍼灸事始めの頃は、刺絡は鍼灸師にとって違法で

あるという認識が蔓延していた。そんなわけでレジスタンスのように刺絡をしていた次第である。
そんな時期に『漢方の臨床』誌の巻頭言に工藤訓正先生の「臨床に刺絡･･･」が載り、共感して、「刺絡療法について」を紀丘子渓のペンネームで投稿した次第。これを縁に東京の大貫進先生からお電話を頂いて、それ以来刺絡研究会でお世話になった。1990 年 5 月のことである。
それまでの自己流の刺絡がいかに下品で危険性があるのを自覚した。医術は手から手へと習う大切さを感じるので、地元で大阪刺絡研究会を始めて現在まで継続している。

刺絡学会の幹部合宿で琵琶湖の狭い温泉で、森秀太郎先生、島田隆司先生と三人だけで浸かりながらお話をしたことがある。深い内容もあるが、ここでは書けない話もあり楽しい一時だったが、お二人とも故人となったのは寂しい。

大阪刺絡研究会
現在まで３０年以上継続しているが、過去に様々な方が参加された。
長崎の諫早から毎月ご参加の整形外科医である木村和也先生は、火鍼･長鍼などを駆使して、従来手術でしか対応できないものにも効いた、と毎回のご報告を皆が興味津々に聴いた。
福岡の桜十字記念病院の木村豪雄先生もご参加いただき、その縁で、東亜医学協会主催の第２８回漢方治療研究会のランチョンセミナーの演者として呼んでもらった。有名な学会で演者として参加できたのは非常にやりがいであった。

第28回 漢方治療研究会

漢方三昧 博多場所

日　時　平成30年10月7日（日）9:00～16:20（予定）

会　場　九州大学 医学部 百年講堂

参加費　一般6,000円・学生1,000円（研究会終了後 懇親会（4,000円）開催）

会頭　木村 豪雄（桜十字福岡病院）

実行委員長　田原 英一（飯塚病院）

特別講演　漢方の横綱にお話しいただきます

「漢方診療　ワザとコツ」

演者　織部 和宏 先生（織部内科クリニック）

特別企画　皆様の挑戦をうけます！行司は栗山先生にお願いします

「医案を語る　筑豊の変」

プレゼンター　井上 博喜 先生（飯塚病院）

コメンテーター　栗山 一道 先生（栗山医院）

ランチョンセミナー（共催 大杉製薬株式会社）

「歴史からみた腹背と刺絡」

演者　南 利雄 先生（壺中天薬局）

主催　東亜医学協会

共催　公益財団法人　日本薬剤師研修センター（予定）

後援　一般社団法人　日本東洋医学会

日本東洋医学会専門医制度 10点　薬剤師研修センター 4単位（漢方 生薬）（予定）

事務局　東亜医学協会　〒101-0065　東京都千代田区西神田2-7-4 島崎ビル6F
TEL　030-3264-8410　FAX 03-3265-5995　E-mail　domei-toa@nifty.com

夏合宿

若い頃はもっと行動的であったので、毎年夏合宿として泊りがけで、京都府美山町や湖西の京都薬大セミナーハウスで開催した。
どういうわけか刺絡とはあまり関係のない、道教の夏合宿も数回行った。
奈良行博先生のご講義を数回行い、加藤千恵先生･宮崎順子先生など一流の道教の先生方もご紹介くださったので、楽しく聴講でき贅沢な時間を堪能できた。
終了後にはロマンチックな夕暮れの湖畔でバーベキューを楽しんだ。

学会とシンポジウム

刺絡学会にいた頃はいろいろと企画して、2003 年には新潟大学医学部の安保徹教授をお呼びして一緒に井穴刺絡のシンポジウムを行った。この時は司会を松田博公さんにお願いした。
写真は左から、安保徹･石原克己･関信之･南利雄･玉井弘文･松田博公（敬称略）
安保先生はお会いして初めてわかったことだが、一切臨床をやらない理論家なのだ。そのせいか我々臨床中心の者があいまいなことを語るのとは逆に断言する言い方で迫力がある。しかし理論と臨床とは乖離があるのだ。
安保理論での指揉み健康法などがブームになったが、実際は井穴刺絡で癌が治るというのは無理がある。
後にご一緒にシンポをした八王子素問クリニックの真柄俊一先生は、安保先生が恩師ではあるが、抄録には、安保理論だけでは癌は治らない、と書いてくださった。

メッセージ

会頭
光藤　英彦
（愛媛県立中央病院 東洋医学研究所所長）

刺絡術の優秀性は1977年のMASS STUDYで確認されています。
今日の医療の最大の課題である老齢者の有病率を日々高くしている医療課題の中味は、実は私どもが時系列分析で把握している慢性健康障害の病人の医療ニードによるものです。
漢代穴位療法の主力であった刺絡術の主要な適応とされる痼疾は、今日の概念で表現すれば慢性健康障害です。すなわち、今日の最大の医療課題の解決は、刺絡術の普及と更に優秀な技術への再開発にかかっています。
共に協力し合って21世紀医療に貢献しようではありませんか。

＜プロフィール＞
光藤　英彦
昭和15年6月　愛媛県生まれ
昭和40年3月　東京大学医学部医学科卒
昭和49年4月　東京大学医学部 物療内科教室関連
日産厚生会玉川病院 東洋医学内科医長
昭和54年8月　愛媛県立中央病院 東洋医学研究所所長

＜師　事＞
内科…東京大学医学部物療内科教室　大島 良雄教授
漢方…温知堂　矢数 道明先生
刺絡……工藤 訓正先生
灸術……代田 文誌先生

＜受　賞＞
昭和58年　大塚 敬節賞

プログラム

テーマ 刺絡とQOL

会頭講演

愛媛県立中央病院 東洋医学研究所所長
光藤　英彦
『痼疾』の認識と時系列分析

シンポジウム

井穴刺絡の実際と今後の展望について
シンポジスト／安保　徹（新潟大学大学院教授）
石原克己（日本鍼灸三通法研究会代表）
関　信之（日本刺絡学会理事）
玉井弘文（愛媛県立東洋医学研究所）
南　利雄（日本刺絡学会理事）
司　　会／松田　博公（共同通信社）

一般演題

演題12題

イベント

はりきゅうミュージアム公開

スケジュール

6月29日（日）

9:00 受付開始
10:00 開会式
総合司会　土居　和恵
開会の辞　日本刺絡学会会長 森　秀太郎
10:10 会頭講演
11:10 演題1・2・3

12:30 通常総会
13:00 演題4・5・6・7
13:45 演題8・9
14:30 演題10・11・12
15:20 シンポジウム
16:50 閉会式
17:10 懇親会

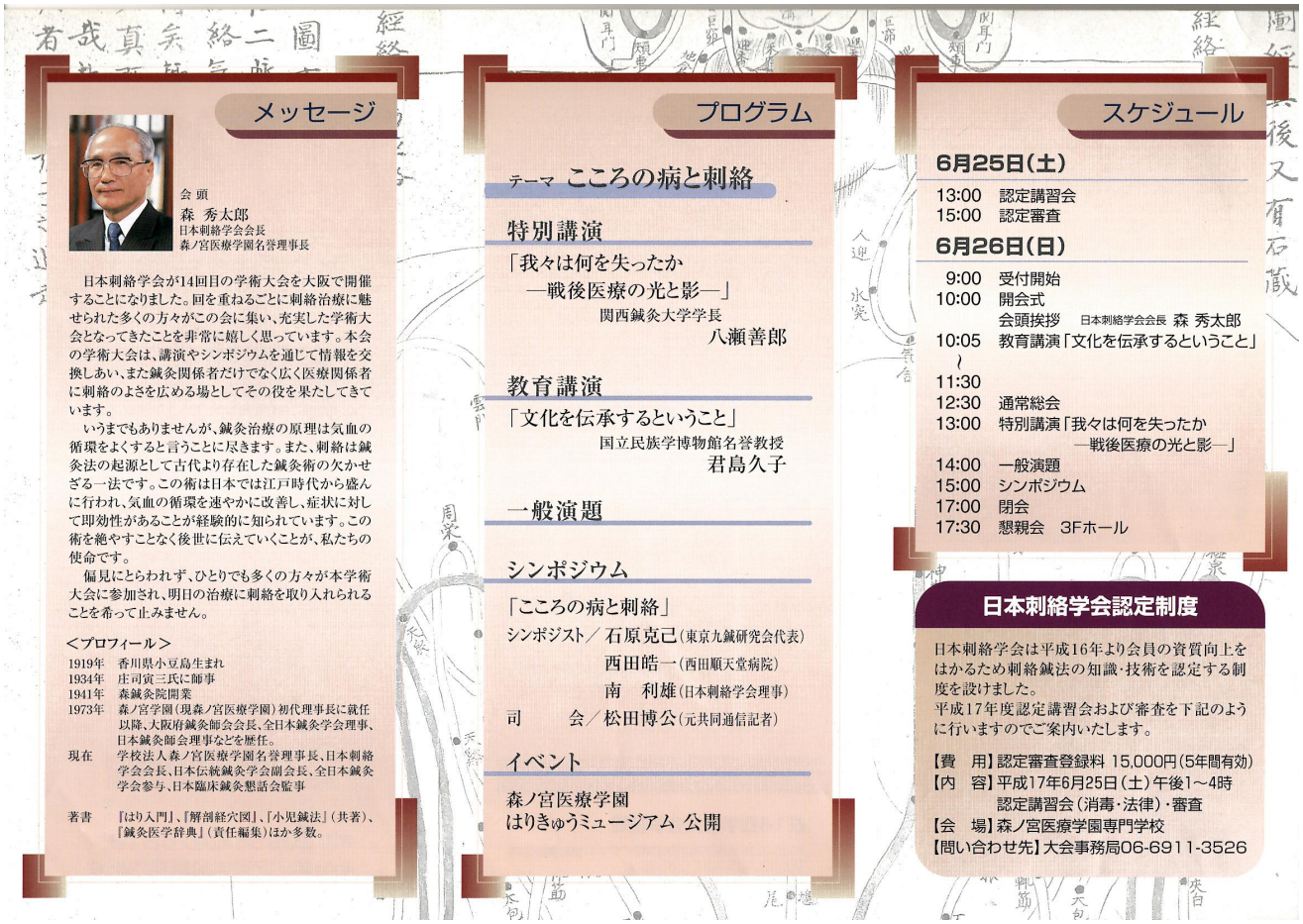
日本刺絡学会の書籍紹介

『写真で見る 刺絡鍼法マニュアル』
－初歩から臨床応用まで－
付Ⅰ：世界伝統医学における刺絡療法の位置づけ
付Ⅱ：刺絡鍼法の歴史

日本刺絡学会編／B5版／153頁
定価 4,300円

発行　緑書房　TEL.03-3590-4441
FAX.03-3590-4446

2005 年には、現在ご一緒に講習会をしている西田皓一先生と千葉の石原克己先生をお呼びして、「こころの病と刺絡」というシンポジウムを行い、このときも松田博公さんに司会をお願いした。
メンバーは身内ばかりなので、和気藹々としたシンポになり、今日多くなりつつある、精神科･神経科疾患にも身体を根本的に緩めることによって根治をめざす刺絡に注目を得た。



メッセージ

会頭
森 秀太郎
日本刺絡学会会長
森ノ宮医療学園名誉理事長

日本刺絡学会が14回目の学術大会を大阪で開催することになりました。回を重ねるごとに刺絡治療に魅せられた多くの方々がこの会に集い、充実した学術大会となってきたことを非常に嬉しく思っています。本会の学術大会は、講演やシンポジウムを通じて情報を交換しあい、また鍼灸関係者だけでなく広く医療関係者に刺絡のよさを広める場としてその役を果たしてきています。

いうまでもありませんが、鍼灸治療の原理は気血の循環をよくすると言うことに尽きます。また、刺絡は鍼灸法の起源として古代より存在した鍼灸術の欠かせざる一法です。この術は日本では江戸時代から盛んに行われ、気血の循環を速やかに改善し、症状に対して即効性があることが経験的に知られています。この術を絶やすことなく後世に伝えていくことが、私たちの使命です。

偏見にとらわれず、ひとりでも多くの方々が本学術大会に参加され、明日の治療に刺絡を取り入れられることを希って止みません。

＜プロフィール＞

1919年　香川県小豆島生まれ
1934年　庄司寅三氏に師事
1941年　森鍼灸院開業
1973年　森ノ宮学園（現森ノ宮医療学園）初代理事長に就任以降、大阪府鍼灸師会会長、全日本鍼灸学会理事、日本鍼灸師会理事などを歴任。
現在　学校法人森ノ宮医療学園名誉理事長、日本刺絡学会会長、日本伝統鍼灸学会副会長、全日本鍼灸学会参与、日本臨床鍼灸懇話会監事

著書　『はり入門』、『解剖経穴図』、『小児鍼法』（共著）、『鍼灸医学辞典』（責任編集）ほか多数。

プログラム

テーマ　こころの病と刺絡

特別講演

「我々は何を失ったか
—戦後医療の光と影—」
関西鍼灸大学学長
八瀬善郎

教育講演

「文化を伝承するということ」
国立民族学博物館名誉教授
君島久子

一般演題

シンポジウム

「こころの病と刺絡」
シンポジスト／石原克己（東京九鍼研究会代表）
西田皓一（西田順天堂病院）
南　利雄（日本刺絡学会理事）
司　　会／松田博公（元共同通信記者）

イベント

森ノ宮医療学園
はりきゅうミュージアム 公開

スケジュール

6月25日（土）

13:00　認定講習会
15:00　認定審査

6月26日（日）

9:00　受付開始
10:00　開会式
会頭挨拶　日本刺絡学会会長 森 秀太郎
10:05〜11:30　教育講演「文化を伝承するということ」
12:30　通常総会
13:00　特別講演「我々は何を失ったか —戦後医療の光と影—」
14:00　一般演題
15:00　シンポジウム
17:00　閉会
17:30　懇親会　3Fホール

日本刺絡学会認定制度

日本刺絡学会は平成16年より会員の資質向上をはかるため刺絡鍼法の知識・技術を認定する制度を設けました。
平成17年度認定講習会および審査を下記のように行いますのでご案内いたします。

【費　用】認定審査登録料 15,000円（5年間有効）
【内　容】平成17年6月25日（土）午後1〜4時
認定講習会（消毒・法律）・審査
【会　場】森ノ宮医療学園専門学校
【問い合わせ先】大会事務局06-6911-3526

鍼灸の講習会

鍼灸を体系的に難しく考えすぎると治療ができなくなる。また習得に時間がかかる脈診ができなくても治療はできる。そう鍼灸は結構アバウトなのだ。素人の患者さんが、昔は民間療法で刺絡をしていたし、中国では火鍼も民間療法でされていたのに、日本ではプロの鍼灸師だどちらもできないのは大いに問題がある。どんな人でも六割くらいの臨床力をつくろう、という思いで講習会を企画した。

1997 年から刺絡の講習会はよくやっていたが、腹診を中心にした講習会を始めて行ったのは 2006 年に東京の東洋鍼灸専門学校で、「誰でもできるサルサル講習会」という、サルでもできるというふざけた名前の講習会だが、人気があり追加講習会もした。これに気をよくして、日本各地で、「腹診を基礎とした鍼灸治療」という名前で開催した。脈診ができなくても客観性のある腹診での治療は簡単だ。

札幌･仙台･東京･名古屋･京都･大阪･香川･高知･福岡、と日本各地で講習会をやったが、そのうちに西田皓一先生をフォローして同じように日本全国で開催した。西田先生のお話は、脈診や難しいことを言わず単純明快であるので、鍼を実践している医師からは絶大な人気がある。お人柄のいい西田先生との旅行は本当に楽しい。

また刺絡では、仙台･福岡･札幌で三輪東朔著『刺絡聞見禄』の講習を数回に分けて行った。

実践臨床講習会

鍼灸の講習会は私の興味のあるものは少ない。大学関係･美容系･経営系、などが多いが、実践で臨床をしている人のものは本当にすくない。
鍼灸雑誌の内容も同じであまり読むきにもならない。
そんなら臨床一筋でやってきた先輩をお呼びして、自分で参加したい講習会を開催しよう、ということで実践臨床講習会を立ち上げた。
まずは臨床７０年の松林康子先生は参加者皆が興奮する手技と臨床経験は伝説化となした。しかし脈診などの名人芸はいっさいなく、実技の素晴らしさはすべて経験と練習の賜物なのだ。
松林先生以外にも臨床中心で治療している人を選んで、数多くの先生方に来て頂いた。